



「6年生を送る会」……そして、3月20日は「卒業式」

3月20日、6年生81名はこの藤城小学校を卒業します。先週の『6年生を送る会』、最初は正面のひな壇に座る晴れがましさに照れていた様子でしたが、会が始まると、そこは6年生、1年生から5年生までの発表をくいいるように見つめていました。その姿には、自分自身の6年を重ねているかのような、やわらかい空気が漂っていました。「去年まで5回、おれたちも卒業生に向けてやったなあ」そんな顔つきで…。それが6年生の出しものに移ると、空気が濃くなったように感じました。入学からの6年間。それはやはり、特別な「思い出」で…。いや、「思い出」という三文字で束ねてしまうには、あまりにもまだ身近なこと。



男女仲良く、いつも穏やかで、やるべきことはしっかりやって…。そんなすばらしい6年生ですが、もちろん楽しかったことばかりではないでしょう。どうしようもなく涙があふれたこともあったことと思います。卒業式が近くなってくると、そんなさまざまなシーンが、少しばかりの酸(す)っぱさを伴って思い出されるのではないのでしょうか。

♪～君がいたから頑張れた 支えあうこと 分かち合うこと あふれるほどの愛をくれた あなたにありがとう～♪

6年生が最後に歌った「変わらないもの」。透き通った声で、6年間のすべてを込めて歌い上げました。歌い終わったあとは深ぶかの一礼……。そろそろ何度も練習した「礼」でしたが、少し長い礼になる人もいて、けっこう不揃(ふそろ)いに。でも、それがかえって、一人ひとりが何かを思い、感じていたからなのかなあと…。

今のわたしをつくり出したすべてのものに、深く……一礼



さて、とうとう卒業です。今、となりに座っている友だち。すぐそこで語りかけている先生。ずっと勉強につき合ってくれた机、椅子。思い出が詰まった教室、窓から射し込む陽の光、春の風。黒板の隅(すみ)に書かれた担任の先生からのひと言……。そんな私の、今の「いのち」をつくり出したすべての人、すべてのものに、ただ静かに頭を垂(た)れる。多くのものによって生かされているわたし。誰が指図(さしず)するでもなく、誰に指図されるでもない、つながりのかけがえのなさと思議(ふしぎ)さに深く一礼。そんな、深い卒業式になることを願います。

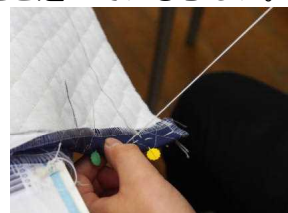
社会は「信じる」ことで成り立っている。だから「支え合う」んだ!

みなさんに大切なことを伝えます。昨年も卒業生に伝えたのですが、私たちが生き、生活している社会というのは、私があなたを、あなたが私を信じることで成り立っています。信じているからこそ他人の心の痛みを自分のことのように感じたり、感激の涙にもらい泣きしたりする。だから人と人とはつながり、支え合おうとします。その、人と人とが支え合うしくみのことを「社会」といいます。たとえ生まれたばかりの赤ちゃんであっても立派に家族を支えているんですよ。だって、赤ちゃんの寝顔を見ただけでみんな幸せな気持ちになるじゃないですか。だからいま、あなたはここにいるだけで、生きているだけで必ず誰かの支えになっている。そうです。みなさん一人ひとりがいるからこそ、社会が成り立っているのです。信じること。つながり、支え合うこと。それが藤城小学校の『思いやりの心をもって生き生きと活動する』であると考えています。最後になりましたが、卒業おめでとうございます。

8年経った東日本大震災のことを書こうか悩んだのですが、この話にします。

今年の1月下旬に千葉県でおきた小学4年生の栗原心愛さんが虐待(ぎゃくたい)によって自宅で死亡した事件。あまりにも痛ましく、連日の報道には胸が締めつけられました。父親は、しつけだったと述べているらしい。

5年生の家庭科の授業では、針と糸を使ってナップサックを作りました。その様子を見てあることに思い当たった。「しつけ縫(ぬ)い」という言葉。これはミシンでの本縫いの前に、布と布とがずれたりしないよう「しつけ糸」でおおざっぱに縫い付けておく作業のこと。この作業の後、ミシンで仕上げていきますが、ずれないように仮止めしてあるので作業も順調に進む。しかも、この「しつけ糸」、仕上がったあとはスルスルと簡単に抜けて、抜いた後は何のあとも残らない。



「しつけ糸」のように、何のあとも残らないのが『しつけ』です



「おはようございます」「ありがとうございます」「ごめんなさい」などの挨拶(あいさつ)や「時間を守る」「使ったものは片付ける」「人の話は静かに聞く」などのルール、また、「困っている人がいたら助ける」「人をだまさない」「暴力をふるわない」などの市民道徳は、「子育て」として親がわが子に『しつけ』してきたことです。

いつの間にか自然とできるようになった頃には、親にしつけられたことなんて忘れてしまっている……。何のあとも残さないのが『しつけ』。心や体に傷痕(きずあと)を残すようなやり方は、しつけにはならない。ましてや、子どもの命が絶たれるなど…。